

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

(第 2 期 6 号-通巻第 18 号-)

2011 年 10 月 30 日

故馬場宏二氏 弔辞・追悼文

本号が編集途上にあった 10 月 14 日、大変残念なことに馬場宏二氏をご逝去になられました。同氏は、本誌の出発点となった 2007 年 12 月の「宇野弘蔵没後 30 年記念研究集会」で基調報告者の一人として報告され、その後も本誌にしばしば論稿を投稿してこられました。生前のご指導ご鞭撻に感謝させて頂くとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。また、本号では、山崎広明氏（東大名誉教授）、三和良一氏（青山学院大名誉教授）によるご葬儀に際しての弔辞、柴垣和夫氏（本誌顧問委員）の「馬場宏二君を送る」を掲載させて頂くこととなりました。

馬場 宏二（ばば・ひろじ＝経済学者、東大名誉教授）

1933 年、群馬県生まれ。

1953 年、群馬県立渋川高等学校卒業。

1957 年、東京大学経済学部卒業、東京大学大学院社会科学研究科修了
経済学博士

神奈川大学講師・助教授、東京大学助教授・教授を経て、1994 年大東文化大学教授。

2011 年 10 月 14 日、78 歳没。

http://www.unotheory.org/news_II_6

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

事務局：東京都練馬区豊玉上 1-26-1 武蔵大学 横川信治

電話：03-5984-3764 Fax：03-3991-1198

E-mail:contact_at_unotheory.org

ホームページ <http://www.unotheory.org>

弔 辞

山崎広明

馬場宏二君 今日、このようなかたちであなたに会うことになろうとは全く考えていませんでした。この前あなたに会ったのは、今年の2月3日に開かれた東京大学社会科学研究所の開所記念式典の時でした。その時、会に出席して元気な顔を皆に見せてくれたので、この分なら持ち前の強い精神力で病を克服できるのではないかと、私は将来に期待を抱いたものでした。その君が、それからわずか8ヶ月余でこの世に別れを告げるとは、全く痛恨の極みであります。

私があなたに最初に出会ったのは、1955年4月、東京大学経済学部の大内力先生の演習においてでした。それ以来56年余に及ぶ長いつきあいでしたが、この間、学部の大内演習で2年、大学院で4年、お互いに大学院を出たばかりの駆け出しの教師として神奈川大学で4年、その後東京大学社会科学研究所で22年半、演習の仲間や職場の同僚として励まし合いながらその生活を共にしてきました。

学部学生時代には、今考えると学生運動のいわば谷間の時代に、引き受け手のない自治会委員長となり、教授会と全学連執行部との関係の調整に共に苦労させられたことが苦い思い出として蘇ってきます。政治的信条というよりは「自治」の灯を消してはならないという想いが私達の行動を支えていたのではないかと思います。

そして、神奈川大学の時代には、自民党の国会議員であった人が大学の理事長・学長を兼ね、「独裁的」に運営されている大学のあり方に対して、これを批判し、「反体制三人組」と呼ばれたこともありました。この時の私達の行動の原点も教授会の「自治」を守れということでした。

その後、1970年前後における「大学紛争」の時代には、東京大学社会科学研究所の教官として、今度は「大学解体」を叫ぶ学生運動の矢面に立たされ、大学院研究科委員会・交渉委員として、大学の「解体」を避けるために、大学院生自治会の代表とぎりぎりの交渉を行いました。この時、あなたの冷静な判断に私達は大いに助けられたものです。

一方、社会科学研究所の研究面では、その看板である全所的プロジェクト研究（全体研究）に、あなたは精力的に取り組まれ、特に、1986年から行われた「現代日本社会」研究では、「会社主義」という概念を研究のキーワードとして提示して研究をリードされました。経済だけではなく、法律・政治・社会にも及ぶ学際的研究では、あなたの視野と問題関心の広さが人びとを引き付け、特殊といわれるものの中に普遍性を見つけ、その上で特殊を捉え直すという大内先生仕込みの思考を駆使した成果がここに実現されたのだと思います。

東京大学を停年で辞められた後、大東文化大学に勤務されましたが、そこでの生活は誠にみごとなものでした。あふれ出るアイデアを次々に活字にされる生きざまに私は圧倒されました。宇野理論をいかに現状分析に生かすか、そしてそれによって宇野理論をいかに再生させるか、その強い使命感に裏打ちされた骨太の論理の展開はみごとでした。

私達が尊敬する宇野弘蔵先生は、学者には都会の秀才、田舎の秀才、都会の鈍才、田舎の鈍才という四つのタイプがあり、この中で最もいただけないのが田舎の秀才であると言われたことがありますが、あなたは渋川という田舎から東京に出、学界の心ある人びとが

瞳目する研究成果を次々に生み出したのですから、まさに田舎の秀才、というよりは秀才を超える田舎の天才に近い存在だったと思います。この意味で、あなたは宇野先生の想定外の人物として宇野理論の再生に大きく貢献されました。

馬場宏二君、この上は、自らの78年の人生を振り返り、今は「よくやった」と自分自身をいたわりながら静かにお眠り下さい。そして、残されたご家族や私達友人・後輩がこの世で生きる様子を暖かく見守って下さい。さようなら。

2011年10月18日

友人の一人として

山崎広明

弔 辞

三和良一

馬場君

1955年に駒場から経済学部に進学して以来、半世紀を超えるおつきあいでした。東大大学院時代に、経済団体連合会の10年史と一緒に書いてから、しばらくの間は、それぞれ異なる領域の研究にいそがしく、疎遠な時期がありました。それでも、電車のなかで出会ったりすると、いろいろ教えてくれましたね。あるとき、宇野弘蔵先生は、帝国主義段階の資本蓄積様式の特質を、不断の過剰人口を基礎とする労働力の商品化と言っているが、そうなのかと質問したとき、あなたは、即座に、あれは宇野さんの間違いだと断言して私をビックリさせました。

あなたとの接触頻度が増えたのは、1973年からの社研の共同研究「ファシズムと民主主義」に私が参加させてもらってからでした。そのころのあなたは、交通事故の後遺症に悩まされながら、現代資本主義分析を軸に、宇野段階論の修正作業に向かっておられました。

そして、帝国主義段階の典型国としてはドイツよりもアメリカを重視すべきであるという論点を手がかりに、1989年の論文「経済政策論と現代資本主義論」で、はじめて、第一次大戦までを古典的帝国主義、それ以後は現代資本主義と区分する独自の段階論を体系的に提起されました。この馬場段階論は、その後、『新資本主義論』、そして最後の作品である『宇野理論とアメリカ資本主義』でさらに精緻に体系化されたわけです。

いわゆる宇野シュレーには評判が悪いのだと言っておられましたが、私のような外野の者には、馬場段階論は、さきに逝ってしまった加藤榮一君の段階論とならんで、宇野理論の可能性を見事に展開して見せた素晴らしい作品に思えます。

馬場君

本音を言わせてもらおうと、馬場理論に惚れたのは、宇野理論の新展開のところではありません。あなたの作品の通奏低音として響いていた、資本主義への透徹した批判精神こそが、あなたの魅力の中心なのです。

現代資本主義が実現した高い生産力がもたらした「過剰富裕化」は、人間社会を過剰なまでに分解して社会の解体を進めること。そして、過剰富裕化が、資源枯渇・環境破壊を招いて人類が地球上で存続することを不可能にする、という危機意識が、あなたを知的営為に駆り立てていたと思います。

そうであるからこそ、あなたと加藤君を巻き込んで、『資本主義はどこに行くのか—二十世紀資本主義の終焉』を纏めることが私の年来の夢だったので。あなたは、その論文で「人がもし同類の生物の存続を望むなら、根本的には金儲けと安楽の資本主義から離脱する必要がある。」と断言しています。加藤君も、「市場経済の『悪魔の挽き臼』が人々の生活を踏み砕き、地球環境を破壊」する危機を指摘しました。

同じ思いを共にする3人で、一冊の本を編めたことは、私の人生で最大の喜びでした。

馬場君

あなたの魅力は、用語法の巧みさにもあります。「過剰富裕化」「過剰商品化」「過剰効率化」、そしてその先に待ち受ける人類史の終焉を見通した「悲しき唯物史観」。日本の特徴を見抜いての「会社主義」、「刹那的思考」、「大衆資本主義」などなど、本邦初演のフレーズを数多く社会に送り出しました。作品の論理展開の巧みさと合わせて、私たちは、それを「馬場節」と名付けて楽しんだものです。

また、あなたの講義や座談の語り口も見事でした。1989年から放送大学のラジオ講座「日本経済史」に出演していただいた時の講義は、私の家内が、馬場さん講釈師になれるわねとあきれたくらい、間合いの妙が冴えていました。

あなたは、思考力、筆力そして話術の三拍子が揃った、類い希な研究者でした。そのあなたを失ったことの哀しみは、限りなく深いのです。しかし、あなたが居なくなったことが意味するところの大きさは、今はまだ計ることができません。

私としては、さきに加藤君を送り、いまあなたとお別れすることで、資本主義批判の同志・盟友をうしない、途方に暮れています。あなたが「学問的遺言だ」と言って渡してくださった私の原稿へのコメントを手がかりに、戦線を立て直すしかありません。

馬場君

あなたは、最後の闘病のなかで、研究はもうやり過ぎたから、元気になったら奥様と旅をしたいと言っていましたね。病床で校正をした最後の作品を、京子奥様に捧げたことは、覚悟の上でのことだったのでしょうか。あなたの心残りとお様のお哀しみは、はかり知ることできません。

私たちとしては、あなたの研究者としての心を引き継いで、現代批判を進めることしか、できることはありません。

今は、ただ、安らかにお眠りください。

2011年10月18日

馬場宏二君を送る

柴垣 和夫（本誌顧問委員）

馬場が逝った。覚悟はしていたが、それにしても早すぎる。もう少し時間があり、できれば予告されていた「一賢人四凡人の会」での、彼の最後の研究報告を聞きたいと思っていた。

9月の半ばだったか、林健久君と語らい、彼を東大病院で診察してもらうために東大社研の末廣昭所長、木村久事務長を煩わし、それが実現したのが10月7日だった。彼は令息と令嬢に付き添われ、農総研の小澤健二君が同行して、寝台付きの介護タクシーで病院の外來受付に現れたが、やつれてはいたものの「未だ死ぬのは早い」と強気の言葉を残して診察室に向かっていった。それが彼との最後だった。

10月15日、林夫妻と中国にでかける予定日の朝、奥さんから、馬場の容態が急変し14日夜に亡くなったとの電話をいただいた。東大病院から帰宅し、数日おいて近所のなじみの病院に入院したと聞いて、少しほっとしていた矢先の訃報だった。中国に着いた私たちは、限りなく透明で、鏡のように対岸の樹木を写す靈気に満ちた九寨溝の湖に、彼の冥福を祈った。

帰国して、彼にふさわしい立派な葬儀が営まれたことを聞いた。林君とともにお宅を弔問し、奥さんから山崎廣明、三和良一両君の弔辞もみせていただいた。私のこの文章は、お二人の弔辞に強く共感した上で書いているので、重複は避けるが、三和が指摘している馬場の仕事に一貫している「資本主義への透徹した批判精神」については、若い世代の諸君に受け継いでもらいたい点として強調しておきたい。

相当昔のこととなるが、大学院で彼の教えを受けた若手の研究者が、「馬場先生の学風は、カミソリとは正反対の鉞のような重量のある鈍器で、ひとたび先行研究に対する批判や新説がずばり提示されると、その重みがじわじわと迫ってきて余韻が長く続く」と語っていたことがある。その実感は私も同様だ。私は幸運にも、彼の新説の醸成過程を身近で観察、というよりある意味でそれに参画する機会に恵まれた。それは職場が同じだったことにもよるが、私の研究室で、故加藤栄一を交えて、ときには酒を肴に——飲めない馬場はコーヒーだったが——三人でよく駄弁っていたことに負っている。1980年代に三人で、当時外国人研究員として社研に寄留していた Lonny Carlile 君（現在ハワイ大学教授）に、毎週英語でのプレゼンテーションの手ほどきを受けていた頃、彼のプレゼンのテーマには「過剰富裕化論」を始めのちの馬場説のキーワードがよく登場した。レッスンの修了後には、皆が得意な日本語で議論を継続し、さらにその場は飲めない馬場を含めて、赤門前の「万里」に延長されるのが常だった。

彼の「人と学問」を論じる機会を、残された友人や若い諸君と相談して、そう遠くない時期に計画したいと考えている。

2011年10月30日